

## 2008年度 社会学部優秀論文賞（安田賞）講評

選考委員代表 居 樹 伸 雄

本年度は、社会学部優秀論文賞（安田賞）候補論文として、別表に掲げたように、11篇（13名）の卒業論文（社会学科8篇、社会福祉学科3篇）が、研究演習担当者から推薦された。6名の委員から成る社会学部優秀論文賞（安田賞）選考委員会は、それぞれの候補論文について、オリジナリティを重視し、独創性という観点から、選考を行なった。選考に当たって、より具体的には、①主題の重要性、②方法の妥当性・厳密性、③分析・考察の確さ・周到さ、④結論のもつ重要性、といった点に留意しながら、慎重に審査を進めた。その結果、1篇（1名）に最優秀論文賞を、6篇（8名）に優秀論文賞を、4篇（4名）に佳作を、それぞれ授与することとした。社会学部教授会にて承認され、卒業式の日に授与式を行なった。

ここでは、最優秀論文賞を受賞した、渡邊真央さんの卒業論文「外傷体験を起因とする生存者罪悪感：～生存者罪悪感の概念的枠組みと手記・事例分析によるトラウマ反応への包括的理解の試み」について、詳しくは指導教員の推薦文に譲るが、若干ながら触れておきたい。この論文は、「生存者罪悪感」に関する研究を文献研究と事例などの分析によって理論的に進めたもので、卒業論文としてまさに秀逸である。同時に、これまでのこの分野の研究レベルをさらに高めた貴重な研究でもある。その点で卒業論文の枠を超えており、充分学術的価値もあるものといえる。

おそらく、ここまで研究を深め、論文全体から溢れ出る迫力を生み出しているのは、これまで抱え続けてきた過去の個人的経験（付属池田小事件時に同中に在籍）への心のわだかまりをこの際払拭したいという思いと、自分のこれから関わる職業に打ち込むために自分自身に決着をつけたいという思い、が背景にあるからであろう。ここで選考・審査に当たった委員の選評の一部を紹介しておく。いくつかのコメントの中に、量・質とも他の論文と別格の感があり、修士論文として充分通用するレベル、あるいは、思わず姿勢を正して読む内容である、といった指摘があったが、このような指摘が端的にこの論文の質の高さを表現しているといえる。

なお、この他に優秀論文賞を受賞した6篇（8名）の論文、そして佳作となった4篇（4名）の論文については、ここでその内容を紹介することは出来ないが、全ての受賞論文が、それぞれに充分内容のある力作であった。論文作成に取り組むに当たって、それぞれの関心の高いテーマを積極的に取り上げ、研究に打ち込んだ結果であろう。同時に高い資質・能力を示していたように感じたことをここに記しておきたい。受賞者の13名の学生諸君が、この受賞を一つの励みとして、将来それぞれの分野において活躍することを大いに期待するものである。

最優秀論文賞	卒 業 論 文 名
渡邊 真央 (池埜聡ゼミ)	外傷体験を起因とする生存者罪悪感： ～生存者罪悪感の概念的枠組みと手記・事例分析によるトラウマ反 応への包括的理解の試み
優秀論文賞	卒 業 論 文 名
上奥 彩月 (山上浩嗣ゼミ)	家族と孤独のあいだで ～個食にみる現代家族～
越前 貴史 (中野康人ゼミ)	「せんとくん」の計量テキスト分析
加藤 秀和 (田中耕一ゼミ)	「道德化」する社会
鯛 夏希 橋本 郁子 大平 愛 (森久美子ゼミ)	大学生のアイデンティティ形成と友人への依存の関係
太田 有紀 (阿部潔ゼミ)	正しいノスタルジーブームのすゝめ ～未来へのユートピアを描く ために今できること～
奥津 千秋 (小西加保留ゼミ)	救急医療における「たらい回し」の現状とその対策 ～医療ソーシャルワーカーらへのインタビュー調査を通して～
佳 作	卒 業 論 文 名
野村 侑 (岡田弥生ゼミ)	ラフガディオ・ハーンの作品に見る明治日本人の宗教性について —神道と近代西洋文明—
瀬戸口真生 (芝田正夫ゼミ)	放送とインターネットの関係 —「規制方法」という観点から—
浪花 加奈 (奥野卓司ゼミ)	「ネタ」の遊び場、匿名掲示板
新谷 友紀 (武田丈ゼミ)	大災害後の復興住宅に発生する課題と、それについて必要とされる コミュニティケアについて ～阪神・淡路大震災復興住宅の考察から～